

国際的な空気環境認証サービスの日本展開を強化 より高い安全性を求めるユーザーへのアピールポイントに

UL Japanは、国際的な空気環境認証サービス「GREENGUARD（グリーンガード）認証」の日本展開を強化している。VOCなどの排出量について、世界でも最も厳しい基準を設定しているこの認証を取得することで、より高い安全性を求めるユーザーへのアピールポイントになり得る。住宅建材メーカーなどへの活用を促していく考えだ。

世界トップクラスの第三者安全科学機関であるULの日本人、UL Japanでは、空気環境認証サービス「GREENGUARD（グリーンガード）認証」の日本展開を強化している。

これは2001年からGREENGUARD Environmental Instituteが開始した室内空気環境の第三者認証。

家庭内汚染物質として、とくに人体に影響を及ぼすものとして問題視されているのが揮発性有機化合物（VOC）だが、グリーンガード認証では、VOCの排出量について、世最も厳しい基準を設定している。さらに、300以上の化学物質についても厳しい排出量の基準を設定。グリーンガード認証を取得するには、それぞれの基準をクリアする必要がある。これまでに29の製品分野で400の工場、1万5000製品に対して認証を付与した。代表的な認証製品は、接着剤、建材、ドア、家具、内装材、塗料など。また、厳しい基準を設けることで、米国などで普及するLEED認証（環境、資源などに配慮して建てられたビルを認証する制度）を始めとした世界の350以上の環境認証プログラムが、室内空気環境に関しては、グリーンガード認証に対応している。

新たなシックハウス問題の指摘も

日本では、かつてシックハウスが社会問題にまで発展したことから、国は2003年に建築基準法を改正し、シックハウスの原因となるホルムアルデヒド発散建材の使用を制限した。住宅性能表



グリーンガード認証を受けると、専用のマークを活用できる

示制度においても「空気環境に関すること」として、ホルムアルデヒド対策やシックハウス対策が盛り込まれた。一方、厚生労働省では、ホルムアルデヒドに加え、13の化学物質のVOCであるトルエン、キシレンなどについて指針値を定めているが、新たな問題が顕在化している。建材メーカーなどでは、指針値で定められたVOCからの脱却を図るために代替材への転換を進めた。しかし、代替材からも揮発性のVOCが発生し、新たなシックハウスの原因になっているのではないかという指摘もある。UL Japanの追谷武寿氏も「日々新製品が生み出されているが、そこで使用される化学物質も日々更新されている。中には規制されていないが、人体に悪影響を及ぼす化学物質が含まれている懸念もある」と指摘する。

こうした中で、日本でも、より厳しい基準で空気環境の質を評価する、グリーンガード認証の存在感が高まってきそう。現在、国内でグリーンガード認証を取得しているメーカーの大半の目的は、海外への輸出対策のため。しかし、今後、グリーンガード認証が、より高い安全性を求める国内の消費者に対してのアピールポイントにもなってくる。「住宅事業者や建材メーカーへの活用を促していきたい」（追谷氏）としている。



国内でグリーンガード認証の測定を行えるのは、UL Japanのみ。専用の機器で測定を行う